



同音異義語の失敗談^[1]

関川富士子

ベルリン日独センター語学研修部長

日本語をドイツ語に通訳する場合、同音異義語で苦しめられることが結構あります。このような事態を回避するためにも事前に原稿をくださるようスピーカーをお願いいたしますが、全部の原稿が揃うことは、まずありません。また、ベルリン日独センターのシンポジウムは「対話」に重きをおいていますので、ディスカッションになると当然のことながら原稿はありません。ですから同音異義語に悩まされ、数多い失敗を繰り返すことになるのです。

私の失敗に、つぎのようなものがあります。

同時通訳をしていたあるシンポジウムのことですが、席上、基調報告者が「ここに三重、四重、五重の輪があります」とおっしゃいました。私はうんうんとうなずきながら訳していたのですが、途中で報告者がOHPに小さな輪をいっぱい描き始められた時、つまり「30、40、50の輪」を描かれた時には青ざめました。また「青少年の教育にはソウゾウリョクが大事です」「イリョウの分野で変化がみられる」「この数値は、どのキカンの統計ですか」「屋根のエンケイに注目して」といった表現にも困りました。「あるトシの基準を目安に」の場合、私の耳には「都市」と聞こえたのですが、前後関係からすると「年」かもしれないと気づき、一瞬言葉に詰まったこともありました。後でうかがったところでは、この例のスピーカーは関西西出身だったそうで、「年」が正しかったとか。難しいところでは。

また、訳している最中は自分も「渦中の人」となってしまう、普段なら分かることでもで判断力が鈍って分からなくなる場合もあります。「先生はコウリンのような人だから」と聞いた時に「後輪ね、縁の下の力持ちみたいな人なのかしら」と考えながらドイツ語のアウトプット文章を頭で練っていたら、私の怪訝そうな表情に気づいたのか隣に座っていた通訳仲間がノートに大きな円を描いてくれ、それを見て初めて「光輪」を思いついたということもありました。

ドイツ語を日本語に通訳する場合も、和文独訳ほどではありませんが、同音異義語の苦労があります。あるシンポジウム席上で「Das ist nichts als Leere / Lehre (レーレ) .」という発言がありました。「Leere (無)」か「Lehre (教義)」か、前後関係からも推測できず、その時は「それは無というか教義というか、実体に乏しいと思います」といったように訳したと思います。幸い後で別のドイツ人参加者がこの話者に「先ほどの『レーレ』というのは無と教義とどちらのレーレだったのですか」と尋ねてくださり、「ドイツ人でも分からないのか」とほっとしました。同じような例に「Steuer, auch hieran müssen wir denken.」があります。「das Steuer (管理、コントロール)」なのか「die Steuer (税金)」なのか、話者の前の文章を通訳しながらつぎの文章を聞きつつ内容を推測していくしかありません。

逐次通訳の場合は事前に原稿を手に入れることができなくても、その場でスピーカーに尋ねることができまので、少なくとも誤訳は回避できます。また、翻訳の場合は翻訳すべき原稿が目の前にあり、

1. 本原稿は、ベルリン日独センター（編）『ベルリン日独センター十周年』（ベルリン、1995年）の54頁～55頁に掲載したものを若干修正したものである。

日本語では同音異義語といっても漢字が異なるわけですから（想像力-創造力、医療-衣料、機関-期間、円形-遠景）意味を取り違えるという問題はありません。

しかし、ドイツ語の場合、ときどき面白い間違いに気づきます。たとえば「einstellen」「entfallen」「umgehen」などは前後関係から「調整する-中止する」「忘れる-当たる、分配する」「避ける-使う、かかわる」か分かりますが、それでも読み違えてしまうこともあるようです。それでも訳としては辻褃があっていたりするので、それに気づいて訳を直すのが校正者の苦勞となります。また「Auf Kosten vieler Menschen wurde das Haus fertiggestellt.」「Mit den Parteien allein kann man dies nicht bewältigen.」「Es gelang ihm, die notwendige Kostenminimierung ohne Aufgabe architektonischer Ausdrucksmöglichkeiten zu erreichen」のように一見一目瞭然のフレーズでも、まさかと思うような誤訳がみられます。漢字の効用というのは大きなものだな、と改めて思われる時です。

日本語の同音異義語での漢字の効用といえば、出版の準備中のワープロ入力ミスを思い出します。これは、ワーブをを使っている方は皆さん経験されたことでしょうか、私も「披露宴」を「疲労園」としてしまったり、「女性金」「冠婚総裁」「工作機会」と数え上げたらきりがありません。印刷に回す前に気づけば笑って直せば良いのですが、ダンテの「神曲」を「新曲」としてしまったポスターが刷り上がってきた時には、ひたすら誰の目にも留まらないことを祈るのみでした。

また、ドイツ語や英語の文章のなかに日本語からの訳文の引用があったり、固有名詞が出てきたりすると、そのもともとの正しい日本語や固有名詞を探すのが大変です。「原典を探すのも翻訳者の仕事」という意見もありますが、ベルリンにいて日本語のオリジナルや固有名詞名を探すのは難しく、執筆者がもう少し翻訳者や出版者の苦勞を考えてくれたらな、と思うことがあります。日本語の文章や書名、機関・組織名を自分でドイツ語に訳される方もいらっしゃる、翻訳の際にそれをまた日本語に訳すこととなりますが、最初から原典を添付していただければ良いのに、と溜息が出ます。また、これはささいな例ですが、センターのシンポジウム出席者に付けていただくネームプレート作成にも気を使います。「ARAI」「TAJIMA」「TAWARA」とだけ教えられると「新井、荒井、新居」「田島、田嶋、但馬」「田原、俵」といくつも作らなくてはならず、これに名前が加わると大変です。「AKIRA」は「旭、輝、暁、啓、顕、晃、彰、昭、晶、章、幌、明、亮、朗」と気が遠くなるほどのバリエーションができあがってしまいます。また、中国や韓国の人名が挙げられる場合「Mao Tse Tung」が「毛沢東」というのは衆知のことでも「der Genosse Luo Chao（同志ルオ・チャオ）」となると中国学専攻の人に尋ね歩くこととなります。

以上は独文和訳の際の問題点ですが、和文独訳でも似たような問題があります。人名や地名の読みが分からない、といった単純な問題から、日本語特有の曖昧表現のためにドイツ語での主語の選択に困ってしまう、といったところまで多岐にわたります。

これをお読みになった皆様が今度ベルリン日独センターのシンポジウムに参加される際は、どうぞ通訳者と翻訳者のことも考えてやってください。私も通訳をする場合は「ドイツは昔からカガク、すなわちバケガクの領域で抜きん出ています」「ドイツのコウギョウの景気、金偏のコウギョウの景気は」「子供のソウゾウリョク、つまりファンタジーを育むには」といったように誤解のない通訳を目指し、努力しつづけます。